

第4章 美術館とまちづくり

第1節 馬頭町広重美術館を核としたまちづくり

(1) 馬頭町商工会まちづくり委員会の取り組み

町の経済団体から役場へ提言を行う活動を行っている団体が商工会である。商工会のまちづくり委員会は20名からなり馬頭町広重美術館が開館する5ヶ月前に当たる2000年6月に発足した。参加者は小売業者を中心に建設会社、サービス業、製造業の方、事務局として町役場から産業振興課・建設課が参加している。委員会発足の発端は1999年に国土交通省の補助による「賑わいの道づくり事業」に対して商工会としての意見をまとめるためであった。この事業により馬頭町広重美術館から町の商店街周辺一帯に掛けて電線地中化による電線のない広い歩道のある街並みが作られた。更に2001年度の栃木県の「人にやさしいまちづくり」支援モデル事業によって本年度から段差の解消や自動ドアの設置と言ったバリアフリー化による高齢者にやさしいまちづくりを地域住民（事業者）との協力により進めている。商店や事務所の自己負担は三分の一で、残りを栃木県と馬頭町で補助を行っている。2003年度には前記の整備エリアの拡大と景観を重視した防犯灯を兼ねた街路灯の設置を目指して国の事業「まちなみ環境整備事業」を検討している^(註1)。

商工会まちづくり委員会では馬頭町広重美術館を起爆剤として観光客が美術館だけを見て帰るのではなく周辺区域が活性化することと、高齢者が多い地域住民の住み良いまちづくりの二点を重点としている。馬頭町広重美術館の建設が決定したことから如何に人を集客するか・まちを回遊型に活性化できないかと言う取り組みも発足のきっかけとなった一つである。美術館開館前には「広重のまち馬頭」をキャッチコピーとしたまちづくりの気運が高まったそうで、その一例として馬頭町観光協会が斡旋している名刺をいただいた。広重の浮世絵が印刷された名刺は図柄が三種類あり、観光協会の補助により正規の価格よりも安価に製作できるのだと言う。馬頭町広重美術館開館後、商店街の売上が伸びたのかを尋ねたところ、売上が伸びたのは美術館周辺と国道293号線沿いにある飲食店であったと言う。特に、町の特産の一つでもある蕎麦屋の売上が伸びたそうである。これらの飲食店の中には「廣重そば」「廣重御膳」などの独自メニューを設けているものもある。また、土産物として「広重の夢」「私は広重です」「広重ふりあん」「広重浮世絵まんじゅう」と言う菓子もあった^(註2)。

まちづくりのモデルとして、商工会まちづくり委員会では役場関係者等と共に葛飾北斎の北斎館があり「北斎の町」として知られている長野県小布施町を二回訪問している。住民交流の場として始まった同町のまちづくりは現在では文化施設が立ち並び町全体が美術館と言った様相で年間百万人もの観光客が訪れると言う。また、広重の作品が息づく町と言うことで「広重美術館」がある山形県天童市と「東海道広重美術館」がある静岡県由比

町へもまちづくりの勉強に訪れたとのことであった^(註3)。

(2) 馬頭町役場のまちづくり

馬頭町内のまちづくり

馬頭町役場のまちづくりは町全体を据えているため、大きく分けて町内のものと那珂川沿線地域活性化協議会(馬頭町、黒羽町、烏山町、南那須町、小川町、湯津上村の6町村)の一員としての二点がある。

馬頭町内のまちづくりは歌川広重の「江都八景」にちなんだ「馬頭町八景」を公募選定し郷土の景観のPR活動を行うなど馬頭町広重美術館を核とした政策に変わりつつあり、主に商工会や観光協会と協力して第一項に掲げた三事業と言った地域の魅力づくりを行っている。馬頭町広重美術館を核としたまちづくりの狙いは「文化の香る町」「魅力的な観光の町」である。この取り組みに町民に参加してもらうものの一つとして馬頭町としてはこれから街並みを江戸風に整備していくため2003年度からは家屋を建てる際に八溝杉材を使った場合は補助金が出るようになるという。馬頭町周辺では住宅会社よりも大工さんに発注した方が安く家を建てられることもあり、地場産業の活性化と街並み景観づくりの一石二鳥を狙ったものであるが、家は早々建て替えるものではないので息の長い活動になりそうである。三十年後あたりに、馬頭町広重美術館が息づいた江戸風の街並みが見られれば、と言うお話だった^(註4)。

町にある美術館とのまちづくり

馬頭町広重美術館は町営であるので、政策にも絡んでおり現在の馬頭町のまちづくりを考える上で欠かせない存在であるが、他の美術館については私立の美術館と言うこともあり現在ではあまり町としては深い関与はないようである。もうひとつの美術館へは元小学校校舎を無償貸与しているほか馬頭町役場では通常私立の施設はホームページでは紹介しないが、町のホームページに観光資源として情報掲載の援助をしており商工会でも同様に観光案内が主要な援助となっている。

いわむらかずお絵本の丘美術館ともうひとつの美術館に公共交通機関で行くためにはタクシーを利用しなければならず不便を感じるが、これに対して馬頭町として町営バスの路線を増加するなどの計画はあるのかお尋ねしたところ、今のところ採算性の問題などでバス会社・町営バスの運行計画はないが将来的には那珂川沿川地域の観光資源の一つとして新しい観光コースの一つとして路線の拡充を検討しているとのことであった^(註5)。

「那珂川連邦共和国」の一員としてのまちづくり

馬頭町は少子高齢社会の進展、若者の流出による人口の減少などによって地域活力が低

下している。観光を中心とした交流人口の増大と地域の活性化を目指しているが馬頭町単独では限界があるため、特色ある観光資源の連携により魅力を発信し観光客を取り組みたいという考えから那珂川沿川地域の一員としての活動も行っている。

那珂川沿川地域では清流「那珂川」を核とした広域的な地域づくりに取り組んでいる。なだらかな山並みや落ち着いた農村風景を持ち、また文化の発祥が古く史跡・古墳の宝庫である同地域であるが、現状課題として「地域活力の低下（若年層流出、人口減少、高齢化進展、基幹産業の停滞等）」を抱えている（那珂川沿川地域は1999年の人口が76,222人であり、栃木県全体としては人口増加傾向にあるにも関わらず減少傾向にある）。地域のニーズとしては地域経済の活性化、交流人口の増大、雇用の場の確保、定住の推進などがある。こうした地域課題の解決法の第一段階として各産業分野（一次～三次）に経済波及効果が高い『観光』に着目している^{（註6）}。

国民調査の観光希望では1位が温泉70.3%、二位が自然の風景63.7%、三位が名所・旧跡45.3%である。これに対して那珂川沿川地域の観光資源は首都圏からの交通に恵まれた、周辺地域との「周遊観光」の適地（那須・塩原、茂木・益子、袋田・大子）観光ニーズに合致した豊富な観光資源（豊かな自然、数多くの観光資源、地域独自の伝統芸能、季節ごとに対応できる新鮮な農産物や農産物加工品、各町村にある温泉施設、核となる施設「馬頭町広重美術館」「なかがわ水遊園」）と恵まれていると言えるが課題は多い。実際の交流人口の動向を見ると観光入り込み客数は340万人（対県比6.3%）である。ただし二極化が進んでおり、烏山町・馬頭町・黒羽町が多数で南那須町・小川町・湯津上村は少数となっている。また、近隣の茂木町における観光増加がこの地域には波及しておらず、宿泊数は16万人（対県比1.8%）と減少傾向にある^{（註7）}。

現状の課題をまとめると、多彩な観光資源の充実の活用 地域内格差の是正と周遊観光の確立 那珂川沿川地域周辺を訪れる観光客の取り組みが主要なものである。この対応策として「那珂川連邦共和国」事業と広域観光の推進が練られている。誘客目標は1999年度の340万人から5年後の2005年度には2倍弱にあたる600万人を見据え、それに伴う経済波及効果を約81億円と見積もり、交流人口の増大と地域経済の活性化を狙っている^{（註8）}。

具体的な活動として那珂川沿川地域活性化協議会では観光資源を活かした広域アピールの必要の声が高まっており回遊できるバスのコースを思案中で、現段階では企画サイドで調査研究中とのことである。これに即した形で実験的に烏山町・黒羽町・湯津上村・馬頭町の周遊バスツアーを行ったところ、無料だったこともあり30名の参加者には大変好評であったと言う^{（註9）}。なお、2002年度4月より発足した「那珂川連邦共和国」は茂木町が加わり7町村からなっている^{（註10）}。

（註1） 2002年12月11日馬頭町商工会佐藤さんへインタビュー。

（註2） 同上。

-
- (註3) 同上。
- (註4) 2002年12月11日馬頭町役場企画情報課笹沼さんへインタビュー。
- (註5) 同上。
- (註6) 2000年度策定『地域間交流連携事業構想策定調査報告書』。
- (註7) 同上。
- (註8) 同上。
- (註9) 2002年12月11日馬頭町役場企画情報課笹沼さんへインタビュー。
- (註10) 那珂川連邦共和国 <http://www.nakagawa-jp.net/>